

僧堂安居を志す方へ

日泰寺僧堂の紹介



曹洞宗認可

日泰寺専門僧堂

釈尊と共に 僧堂安居を希望する皆さんへ

日泰寺での修行紹介

日泰寺は名古屋市の東部丘陵に位置し、名古屋市民からは「覚王山」の地名で愛されています。毎月21日の弘法大師の縁日には、多くの露店が出てたくさんの参拝者で賑わいます。

そんな都会の中にある修行道場ですが、ひとたび僧堂の門を叩けば、この覚王山日泰寺でしか味わうことの出来ない経験ができることでしょう。僧堂では、お釈迦さまへの報恩を上山してくるすべての修行僧と共有しながら、大衆一如の弁道を心掛けています。

日泰寺の法式声明

ブライフ フツダーム
サラナム ガツチャーミー
ブラータン ダンマーム
サラナム ガツチャーミー
プラーシン サンガーム
サラナム ガツチャーミー

これは、日泰寺で毎朝のお勤めの始めにお唱えするパーリ語での三帰礼文です。

タイ様式の須弥壇には、佛舍利と共に下賜されたタイ国国宝の金銅釋迦如来像が安置され、宗門寺院では見られない国際寺



黄金に輝く本尊、釈迦如来像前での朝課



本堂に響きわたる、歎佛会の声明

院の様相を呈した本堂での法要は独特の雰囲気醸し出しています。

また朝課の後には、地藏歎偈や釈迦歎偈、南無大悲觀世音など、独自の差定の中で古来より伝わる声明をお唱えすることにより、その伝統を継承してきています。

特に月二回勤まる歎佛会は、この広い本堂で、響き渡る声明を繰り返して鍛錬することにより

安居したもののすべてが習得していくようになります。

安居者にとって、この本堂で習儀した思い出と声明や進退作法は何物にも代えられない宝物となることでしょう。

独自色のある安居

宗門において近年、僧堂安居の改革が叫ばれ、均一された規程を履修する単位制度の中で、今後は各僧堂が独自性を打ち出していくようになります。

叢林の師家が学人を接待する



僧堂（坐禅堂）の様子



新到上山を迎えて

日泰寺専門僧堂は、曹洞宗認可専門僧堂として令和四年十月に再認可されました。今後とも山内役寮大衆が一如となり、日々の行持を勤めてまいります。安居を志す方、又ご子弟を送り出されるご寺院様には、是非、覚王山日泰寺専門僧堂への安居ご上山を心よりお待ちしております。

曹洞宗認可僧堂として

には、参究にそれなりの時間が必要で、短い安居期間において、どれだけの修得が出来るかわかりませんが、良き出逢いとそれぞれの熱い求道心で、少しでも宗門人としての基礎が身に付くよう幅広く学んでいっても構いません。

《覚王山日泰寺が創建するまで》

今から120年前、北インド、ピプラーワールの地で世紀の大発見がありました。その発掘された骨壺には古代文字で次のような文が刻まれていたのです。

『これは佛陀世尊の舍利（骨）を収める器であり、栄光ある釈迦族の人々とその兄弟姉妹妻子たちのものである』と。



ピプラーワール出土仏舎利骨壺

これは原始佛典にある釈尊の亡くなった後、遺体を火葬に付し、遺骨を八つに分けてお祀りし、その中の釈迦族の人々もその一部を得てカピラヴァツに安置したという記載が事実であったことを証明するものでありました。

釈尊の御遺骨は、仏教国であるタイ国に寄贈され、その一部は同じく仏教国であったセイロンやビルマに分与されました。

それを見聞した日本の駐タイ公使であった稲垣万次郎は羨望たえず、日本の仏教徒に対してもその一部を領与せられんことをタイ国王に懇願したところ、「特定の宗派ではなく、日本の仏教宗派が一つになってお祀りするなら、日本国民に下賜する」との勅諭を得られました。

それを受けて、日本仏教各宗管長が協議を開き、タイ国国王の聖意を拝受することを決定し、奉迎使節団を派遣しました。

そしてそのご真骨をお祀りするために建立されたのが、この覚王山日泰寺の始まりであります。当時、奉迎使節団の曹洞宗代表は、日置

黙仙禅師（当時、可睡斎の住職で後に永平寺貫首）でありました。

禅師は奉安の地の選定から、日泰寺の建立にあたって、多大なる功績を残されました。その為、日泰寺の第三世住職ではありますが、当僧堂では日置黙仙禅師をご開山様と仰ぎ、日々ご回向申し上げます。

我々日泰寺において安居修行する者は、ご本山における高祖さま太祖さまをお慕い申し上げるのと同じく、大恩教主釈迦牟尼如来のご真骨をお祀りする『日本仏教の聖地』としての誇りと責任をもって、日々のご奉仕とご回向を勤めながら、釈尊膝下において坐禅修行が出来る喜びを噛みしめ、僧堂安居を送っております。



荘厳にそびえる日泰寺本堂の全景

『僧堂で過ごす一瞬』

安居を志す方へ
大切な三つの出逢い

得度した僧侶が生涯において、僧堂（叢林）で修行するという期間（時間）は、とても短く、あつという間に過ぎてゆきます。しかし、その短い時間の中には、僧として、また住職として、その後の人生の礎（いしずえ）となる大切な三つの出逢いが必ず待っています。

一つは「禅との出逢い」、次は「師との出逢い」、最後は「友との出逢い」です。みな叢林という特別な環境における貴重な出逢いが自らの今後に大きく左右してゆくものとなるでしょう。

その僧堂での大切な三つの出逢いを、詳しく見てゆきましょう。

禅との出逢い

僧堂に安居する者の多くは、寺院で生まれ育っていても、きちんとした坐禅を経験していないのが現状です。禅のつどいや徒弟研修で、坐禅体験はあるものの、衣とお袈裟を着けて、坐禅堂で面壁坐禅することは僧堂に安居して初めて経験することとなります。



僧堂の坐禅牌

テレビなどの映像を通して、

どうしても「坐禅＝厳しい」や

「警策＝罰（痛い）」のイメージ

が刷り込まれ、坐禅本来の意味である「安楽の法門」の受取り

が出来ないのが大きな問題です。

僧堂において、最初の関門が

「旦過寮（たんがりよう）」です。

客行和尚に連れられ、案内され

るのが僧堂の外単（がいたん）、

そこでは入堂が許されるまでた

だ面壁して坐っているだけ。修

行への覚悟を自らに問いかける

時間でもあります。時計のない

空間で、一日ただ坐るだけの行

為は、『禅』の何たるかを初めて



僧堂外単での坐禅

知ることとなります。

入堂後は、日々如常の行持と

して坐禅に親しんでゆきますが、

やはり、『摂心会（せつしんえ）』

を経験することで『禅』に対す

る気持ちや取り組みは必然的に

変わってきます。

最初は、足やからだが痛いのを

がまんすることばかりですが、

三日、四日が過ぎるとだんだん

慣れてくるもので、疲れから自

然と頭で考える坐禅をやめるよ

うになってくると、「ただ坐る」

ことの意味が少し分かるように

なってくるものです。

磨磚作鏡（ませんさきよう）
（瓦を磨いて鏡と作す）の故事のように、仏を求めない無功德の坐禅に出逢えるのが、僧堂で修行することの意義かも知れません。

師との出逢い

僧堂では、堂長老師をはじめ、お師家（しけ）様（修行僧に禅の教えを教化指導する老宗師）がおられます。

それぞれの僧堂において、それぞれのお師家様の家風があり、その道場の雰囲気や特色がつけられてきます。

古来より、お師家様の家風を慕って雲衲が集まるというのが叢林本来の形です。

そのお師家様に日々接することや、提唱や小参などの問答を通じて、禅の奥深さを見聞することが出来るのも、僧堂ならではの経験です。

小規模の僧堂では、修行僧全員が、お師家様と一対一で禅の受け取りを通じ合致す『入室』や『晩参』なども行われ、自己



西堂老師の小参での懇切なご提撕

の究明が進むこととなります。
論語の述而に『三人行けば、必ず我が師有り』とあります。善を行う者には従い、不善を行う者がいれば自分を省りみればよいということだそうです。僧堂においても、お師家様だけでなく、共に生活するすべての人々が師となり、我が人生の大いなる道標となるでしょう。僧堂において出逢うすべての師が自らの僧侶人生を支えてくれることは間違いありません。

友との出逢い

修行を共にした友人を『法友』または『道友』といいます。

志を同じくしたものが、偶然に時を同じくして、同じ門を叩いた因縁は、難値難遇の出逢いです。

それぞれ生まれ育った境遇は違えども、且過寮をはじめ、つらい修行を共に過ごした経験は、何物にも代えられない思い出となります。

最初は、気に入らない者同士でもちよつとしたことがきっかけで、生涯の大親友になることもよくある話です。「同じ釜の飯を食べた仲」とはよく言いますが、善いことも悪いことも、楽しいことも辛いことも、後になつては修行時代のかけがえのない一ページです。

そんな『友との出逢い』は、僧堂生活で得ることが出来る最大の魅力であり、その後の人生の最高の宝物になることでしよう。

安居を志す人は、そんなよき出逢いを求めて、僧堂の門を叩いてみてはいかがですか？

日泰寺専門僧堂での上山後の配役公務の進め方（おおまかの目安として）

- 安居上山・・・且過寮…入堂までその道心を問うために三日間の仮入門の期間がある。
その間、応量器の作法や、基本の所作・作法を習う。
- 入堂後・・・まずは公務の内容が書かれた心得帖を書写して、日常の公務（直堂…日常生活全般の雑務を担当する役）を加番に付いて覚える。
加番…当番に付き添いながら、先輩の仕事を見て覚える役。
- 一ヶ月目・・・直堂の当役や鐘司の当役にあたって日常の仕事、鳴らし物を覚え、実践する。
朝課の侍者・侍香の公務を覚え、実践する。
行持の前には必ず習儀（ならし）〈練習〉を行うので当った配役が確実に実践できるよう練習して覚える。
- 二ヶ月目・・・殿行・供頭（本堂の準備・行持裏方の進行役）の公務を覚え、実践する。
典座当役（日々の調理当番）の公務が当り出す。
- 三ヶ月目・・・堂行（磬子や木魚の鳴らし物の役）の公務を覚え、実践する。
- 四ヶ月目・・・挙経や回向法を習いながら、朝課維那の当役が順次あたる。
- 五ヶ月目・・・朝課代香の進退を覚え、朝課導師を務める。
- 六ヶ月目・・・歎佛朝課の主賛（節のある声明）の当役があたる。

※一制中を終えるころまでには、一通りの公務をこなせるように日々、習儀（ならし）〈練習〉を行い、間違いや失敗があれば、繰り返し実践しながら、自信を持って各配役が務められるよう各配役が当っていきます。習儀には、役寮・古参が必ず付き添い、細かな点まで入念に指導しています。

釈尊と共に

僧堂安居生活の一日

修行道場での日々の生活を紹介します

修行道場での生活は、自由気ままに過ごしてきた学生生活と違い、一日のすべてを規矩（生活のルール）に則りながら、皆が同じことを行じる大衆一如の毎日です。初めは食べるとき箸の上げ下ろしから寝る時の姿勢まで、細かく指導されながらの作法の習得には、皆、戸惑い叱られながら覚えるのが普通です。しかしそんな毎日も慣れてくれば、その合理的に定められた作法や所作が、自然に身についてきて一人前の修行僧になっていくのが毎年の風景です。

日泰寺専門僧堂の一日の行持風景をご紹介します。

朝の振鈴（起床の合図）

日泰寺僧堂の朝の起床は通年午前四時半。前日の直堂（日直当番役）が三十分前に起床し、僧堂正面で聖僧様に三拝した後、振鈴を振り鳴らしながら、全山を起こします。



暁天坐禅（朝の坐禅）

振鈴が鳴ればすぐに起きて洗面と着替えを済ませます。四時四十五分には、全員が坐禅堂の自分の単につきます。制中は首座和尚が、堂内を検単し、その後、堂長が堂内を廻り、止静（坐禅開始の鐘）が鳴らされ、四十五分間の暁天坐禅（朝の坐禅）が始まります。



直堂は警策を持って堂内を巡香（見廻り）して回ります。鐘楼堂では鐘司が大梵鐘を心を込めて礼拝しながら二分間隔で十八声鳴らします。



五時半に大開静が打ち鳴らされ、坐禅終了を告げます。続いて法堂では朝課始まりの殿鐘が鳴らされ、僧堂内では皆お袈裟を頭上に頂き、搭袈裟の偈をお唱えしてから、お袈裟を着けます。



朝課諷經（朝のお勤め）

殿鐘一會が上がると、大衆は、揃って法堂に上ります。外単の露地位に整列した後、順に上殿します。



殿鐘三會に合わせて、導師が上殿し、最初にパーリー語の三帰三拝「ブツダーム サラナー ム ガツチャーミー」より朝課が始まります。



夏の制中は、楞嚴会が勤まります。楞嚴呪を讀経しながら、堂内を遡行します。



お祖師様や歴住の月忌には、献茶湯をして回向をします。

朝課の後には、日替わりで大般若祈禱や地藏歎偈をお唱えしてコロナ終息の祈禱と参詣者の回向をします。

朝課が終われば、僧堂に帰堂し、聖僧様に三拝。その後、靈光臺（方丈の間）に上がり朝参の拝を行います。

僧堂飯台（朝の食事）

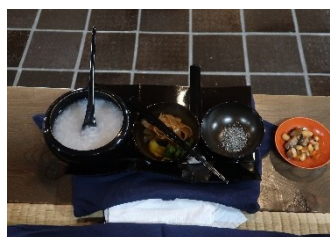
続いて、僧堂において朝の行粥（朝の食事）が始まります。

雲版、魚鼓、大太鼓などの鳴らし物があり、まずは聖僧様にご靈膳をお供えします。そして、食事前のお唱えをします。



その後、淨人（給仕役）によってお粥が順に給仕されます。

皆、定められた作法で食事が静粛に進みます。



最後は、自らの食器（応量器）を自らがきれいに洗い納めて単の上部に掛けて終わります。

日天作務（朝の掃除）



朝の飯台が終われば、全山の掃除が始まります。各配役の持ち場を清掃し、境内等の掃除は全員が出て行ないます。



中食飯台（昼の食事）

十一時になると、お昼の食事が庫院にて行われます。麺類等が多く作られています。



永代経（日泰寺の總供養）



午後の十二時半からは、日泰寺の僧侶全員が出仕して永代経が勤められます。臨時経や納骨供養も行われ、毎日、多くの参詣者がお参りされます。

講義学科（勉強と習い事）

午後は、僧侶としての教養を習得するための講義や梅花流詠讃歌、書道、茶道、華道などの学科が行われます。



晩課諷経（夕方のお勤め）

夕方には、晩課諷経が勤められます。日によりお逮夜や念誦も行われます。



薬石飯台（晩の食事）

五時になると、お昼と同じく、庫院にて晩の食事が行われます。



習儀（作法の練習）



それぞれが法要の配役の進退作法や法式声明を覚えるための練習を行います。

夜坐（夜の坐禅）

夜の坐禅は、普勧坐禅儀を読誦します。



開枕（就寝の時間）

夜の八時半になると就寝の時間となり、各自の単に布団を敷いて就寝します。



修行に準備するものは？〈意外とたいへんな準備品〉

日泰寺僧堂で安居修行の上山に身につけるもの、準備するものを紹介します。

上山に際し、身につけるものは次のものです。

- ・直裾（黒）無地のもの ・色物の着物（グレー、紺など）
- ・半襦袢 ・下着一式（丸首、長袖は不可）
- ・手巾（黒） ・角帯1本（マジック帯でも可）
- ・絡子（黒） ・坐蒲 ・手甲 ・脚絆 ・草鞋
- ・網代笠 ・腰紐（2本）〈衣を上げるのに使用〉

※網代笠と草鞋は僧堂常什物を借用も可能です



◎袈裟行李一式

◇袈裟文庫に入れるもの

- ・袈裟（黒） ・袈裟袋 ・龍天軸 ・血脈
- ・円鏡（立身した者） ・三物（嗣書・血脈・大事）〈嗣法した者〉
- ・涅槃金（5, 000円） ・健康保険証 ・印鑑（シャチハタ不可） ・上山許可状

◇応量器一式（布巾や刷の布を確認し、道鉢袋に頭鉢等を入れ、袈裟行李に結ぶ）

◎後付行李に入れるもの

- ・襪子1足 ・坐具 ・白タオル ・洗面用具（歯ブラシ、歯磨き粉）
- ・浄髪具（安全かみそり…シック・ジレット等何枚刃でも可・爪切り等の衛生用品）
- ・常備薬（特に慢性的疾病の医薬品以外は不可） ・マスク（5～10枚ほど）
- ・僧堂興隆会費（100, 000円） ・財布（カード類不要）

下記のものは、布団袋や行李（衣装ケース）に入れて、事前に僧堂へ送り届けます。

- ・寝具一式（掛・敷布団・枕・毛布2枚）敷布等地味なもの。尚、寝巻とパジャマは不可。
- ・色無地の着物（グレー、紺など）2着 ・白衣2着程 ・半襦袢（4枚位）
- ・改良衣 ・下着5組位（上はU首で肘まで、下は膝までのもので白色、ガラ物は不可）
- ・短作務衣（黒色2組） ・襪子（5足位） ・足袋（3足位） ・靴下（無地・白）3足
- ・運動靴（白のみ） ・雪駄 ・折りたたみ傘 ・タオル（3枚位）
- ・書道用具一式 ・筆記用具 ・ノート（大学ノート2冊）
- ・裁縫道具 ・かみそりの替え刃
- ・目覚まし時計 ・漢和辞典（平仄がわかるもの）

※上山準備にあたっては、季節によってかわるものもあります。内容や種類などで、ご不審なことや、詳しい内容については、僧堂までお問合せ下さい。

（電話 052-751-0214）



※必要なものをまとめるとこのような感じです

「僧堂安居をお考えの方へ」

僧堂安居に関する 質問Q&A

▽親戚だった住職が突然亡くなり、後を継ぐことになりました。お経も読んだことがあります。修行についていけるでしょうか。

【回答】

誰にでも第一歩があります。初めの頃は日常生活に戸惑うこともあるかもしれませんが、出来なかったことが毎日の積み重ねによって自然と出来るようになります。

▽僧侶としての資格に加え、お葬式のやり方など住職として必要な実践的な修行・研修を希望していますが、受けられるでしょうか。

【回答】

修行の第一はお釈迦様の教えを我が物とすることですが、僧侶としての資格や住職として必要な実践的な事柄もおろそかに

はできません。

住職としての実践的な事柄はお師匠様に随うべきことですが、大筋のことは学ぶことが出来ます。また、送行後も相談に出来る方もおられます。

▽妻子がおり、子供はまだ幼く病気がちです。修行中の家族が気になります。何かあった場合、修行はどうなりますか。

【回答】

先ず、ご家族のことを考えてください。修行期間中のご家族の生活に目途がたったなら、安居してください。

修行期間中であっても、ご家族のことを優先してください。但し、他出して僧堂に居ない期間は欠席になります。欠席日数が多くなると資格が取得できなくなることがあります。

▽永平寺、總持寺と日泰寺での修行の違いがあれば教えてください。

【回答】

両大本山と日泰寺専門僧堂と

の大きい違いは修行僧の数に拠るシステムの違いです。両大本山は修行僧の数が多いので、役割分担がはっきりしています。しかも三ヶ月くらいは同じ役を務めますので当たった役には詳しくなりますが、安居が短いと務める役も少ないので全てを知ることはできません。

一方、日泰寺専門僧堂では本山より修行僧の数が少ないので全ての役を毎日交代して務めなくてはなりません。言い方を変えれば、全ての役を勉強することとはできますが、両大本山のようの一つの役を短期集中して行うことはできません。

また、両大本山では修行僧の数も多く、全国から集まって来られますので、一度に友人が増えるのがメリットです。一方、日泰寺専門僧堂では修行僧の数が少ないので役寮さんとも修行僧ともより親密になることができるのがメリットです。

どちらも良い点が沢山ありますので、両方経験できれば理想です。



▽五十代の安居希望者です。体力的な面など修行はできるでしょうか。

【回答】

過去に60歳で安居された方もおられました。体力は人それぞれです。50年積まれた経験はむしろプラスです。

▽定年退職して住職に専念します。改めて住職として必要な実践的な修行研修は可能でしょうか。

【回答】

歓迎します。特別扱いはい出来ませんが、再出発の一助になれば嬉しく思います。期間は三ヶ月を目安としてください。

▽坐禅で長時間、足を組むことができます。このまま修行に行つて大丈夫でしょうか。

【回答】

毎日の坐禅は朝晩の2回、それぞれ45分です。足が組めない場合は、椅子坐禅で対応します。

▽今まで衣やお袈裟を着たことがありませんでした。着るのに時間がかかりますが、修行に支障はないでしょうか。

【回答】

誰でも始めは同じです。時間がかかるのであれば、かければ良いのです。段々と慣れてきます。

▽僧堂には古参の方がいると思いますが、私は人間関係が苦手です。厳しい上下関係があると聞きますが、不安です。

【回答】

修行僧の中には新旧がありますが、みな同じ修行僧です。初めて出逢う人ばかりですので不安があるかもしれませんが、それは相手も同じです。お互いに尊敬しあえる間柄になりましょう。一緒に修行した仲間は一生涯の友人になれると思います。

▽大学は一般の大学で仏教を学んだことはありません。仏教の基礎が知りたいのですが、修行を通じて学ぶ機会がありますか。

【回答】

仏教や曹洞宗に関する学課は多種に亘ります。全てを学ぶことは出来得ませんが、学びのきつけにはなると思います。また、修行期間が長ければ長いほど学ぶ機会は増えますので、長く安居することも考えてみてください。

▽日泰寺ではいろいろな配役を経験できると聞きます。ただ、たくさんの配役をこなせるかどうか、自信がありません。

【回答】

同じ修行仲間が助けてくれます。お互いに助け合って一歩進めましょう。不安はやがて自信に変わると思います。

▽メガネのフレームはどんな物でも良いのでしょうか。また、普段はコンタクトレンズを使用していますが使えるでしょうか。

【回答】

メガネのフレームは安価で華美でない物（黒縁など）にしてください。コンタクトレンズ

の使用は可能ですが、上山当初は時間も無く管理もしづらいので、生活に慣れるまではメガネの着用が望ましいでしょう。

▽知り合いのお寺で首座を務める話があります。安居をしながらでも他の寺院で首座を務めることはできますか。

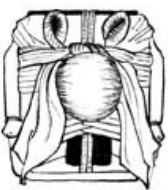
【回答】

僧堂に安居しながらでも立職することは可能です。その場合は、立職する寺院から「制中禁足解除願」を本庁に提出することになりますので、ご相談下さい。法戦式等で他出している期間は、僧堂の方は欠席扱いとなります。

▽感染症予防のマスクはどの程度用意すれば良いでしょうか。

【回答】

5〜10枚程度用意してください。その後は僧堂で支給します。



《堂監寮より》

修行を志す人の境遇や事情はそれぞれですが、発心して僧堂の門をたたいた時の思いはみな真剣そのものです。

そんな初心の思いが最後まで続くことが出来るよう、上山後も個々にサポートする対応を心掛けています。

道場の様子や日常生活をする場所、荷物の整理状況など、実際に目で見て確認することも、ご本人やご家族の方も安心されることと思います。ぜひ一度、見学に來られて不安に思っていることや、気になることを質問しながら見て頂くことをお勧めします。

時代に即した開かれた僧堂として、更なる修行環境の充実を目指しておりますので、皆様からの忌憚のないご意見ご質問を頂ければ幸甚に存じます。宜しくお願い申し上げます。

覚王山日泰寺専門僧堂

〒464-0057
愛知県名古屋市中千種区法王町一―
電話 052 (751) 0214

曹洞宗認可専門僧堂



覚王山日泰寺専門僧堂

〒464-0057

愛知県名古屋市中種区法王町一丁目

電話052(751)0214